

[評価] 5 : 達成している 4 : ほぼ達成している 3 : どちらともいえない 2 : 取り組みを検討中 1 : 改善が必要

1	教育理念・目標等	評価
1	1-1 教育理念は定められているか	5
2	1-2 教育目標は定められているか	5
3	1-3 学校の特色は何か	5
4	1-4 教育理念・目標に基づく教育が行われているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

<教育理念>

国境を超えて理解し合うためのコミュニケーション力を、日本語を通じて養う。

<教育目標>

[日本語科]

[本年度の課題]

オンライン授業や CEFR の普及により、日本語教育のあり方が変化を迎えている。本科の教育理念を大切にしつつ、各レベルでの教育目標を再確認し、新しい考え方も積極的に取り入れていく。

[取組の結果と点検・評価]

文化庁がまとめた「日本語教育の参照枠」を参考に各レベルの教育目標、教育内容、評価方法について見直した。また、文化庁「専修学校遠隔教育導入モデル構築プロジェクト」の成果として、本校独自の留学 Can-do 一覧が作成され、それをもとにしたオンラインコースの実証授業も行われた。

[次年度への課題]

対面授業主体となることが予想されるが、コロナ禍前に戻るのではなくオンライン授業や「日本語教育の参照枠」を取り入れたことで得た知見をもとに、よりよい教育を目指していく。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

引き続き社会の状況を考慮しつつにはなるが、対面授業の時間を増やし、対面授業とオンライン授業の双方のバランスを考えながら、これからの日本語教育に適応できる能力を養う。また、対面授業における教育能力、指導能力の向上を目指すための機会、授業を提供する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

前期の第1回教壇実習はオンラインでの実施となったが、授業準備や実習生が授業を配信するのは対面で実施することができた。ただし、教壇実習自体はオンラインだったため、教室でどのように教師は振る舞うべきかという点について学ぶことが難しかったと思われる。

[次年度への課題]

実習の授業自体は対面に戻るが、オンラインで授業をする場合の視点やスキルは今後も求められていくであろう。全面对面授業に戻った際に、対面での授業を前提としつつ、オンライン授業の視点やスキルをどう養っていけばいいのかを考え、カリキュラムに組み込んでいく必要がある。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

アフターコロナを見据え、ビジネス環境の変化などにも注意を払いながら、よりきめの細かい指導を実現するべくカリキュラムの検討を行う。また特にコロナ禍における異国での長期間にわたる学生生活でメンタル面に不安を持つ学生もいることに鑑み、引き続き生活面や心身面でのサポートや支援を充実させる。

[取組の結果と点検・評価]

一部でオンライン授業にも対応したが、基本的には感染対策を講じつつ対面授業へ復帰させることができた。学生・教員とも、およそ三年間に及ぶコロナ禍での学習や生活に慣れてきたこともあり、社会状況に応じて臨機応変に対策を取ることができ、特に大きな混乱は見られなかった。コロナ禍で実施に様々な変更を余儀なくされた実習についても、ほぼ本来の形へ戻すことができた。

[次年度への課題]

始業時間が本来の時間に戻り、在校生（二年生）は慣れない環境であるため、学習のリズムや時間管理について、前期は相応のケアが必要になるものと思われる。また支援が必要な学生を受け入れる予定で、様々な特性を持つ学生への対応を学科全体で考え、より開かれた多様性のある学びの場にしていくための工夫と努力が必要になるであろう。

<学校の特色は何か>

学校法人文化学園の設置する専門学校の日本語教育機関として、文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院への進学を希望する外国人留学生の日本語教育を実施している。また、文部科学省より国費留学生日本語教育委託校に指定されており、行政からも信頼を受けている。外国人留学生の学生会館も整備され、安心して学生生活を送ることができる。

<教育理念・目標に基づく教育が行われているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

来年度も4月開講当初から国内に全学生が揃うことは難しいと予測される。入国できない期間に、一人ひとりの学生に明らかな学習目標を提示し、学習へのモチベーションを維持するように指導することが肝要となるだろう。今年度の運営を参考にしつつ、来日状況に合わせて柔軟に対応する。

[取組の結果と点検・評価]

4月期生は5月末には全員来日したため、昨年度よりも安定した授業運営ができた。前期は感染症対策のためオンラインと対面を併用の授業であったが、後期はほぼ対面授業を行うことができた。対面で学習や進路の指導ができたことは大きな効果があったと思われるが、出席率の低下が問題点としてあげられる。

[次年度への課題]

近年様々な事情を抱えた学生が入学してくるため、これまで以上に学生一人ひとりの様子を見て必要な指導、声かけを行っていく。また卒業時の目標だけでなく短期間での目標を設定し、学生と共有することで卒業までのモチベーションが保てるようにしていく。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

本年度改訂した教材、評価を見直し、さらに改善していく必要がある。また、近年は多様な学習者がいるという認識が高まっているが、本科においても引き続き学生同士がお互いの文化や言語、その他の背景を尊重しつつ、ともに同じ目標に向かって努力できるような雰囲気づくり、環境づくりに努力していく。

[取組の結果と点検・評価]

他者との関係性を築くのが苦手な学生もいて、昨年度からの課題である「学生同士がお互いの文化や言語、その他の背景を尊重しつつ、ともに同じ目標に向かって努力できるような雰囲気づくり、環境づくり」を達成することが困難であった。学生たちの配慮と努力でなんとか乗り切ることができたが、一部の学生に負担をかけてしまう結果となった。

[次年度への課題]

学生数が増えると一人ひとりの話をじっくり聞くのは難しいが、一部の声を上げた学生だけが有利にならないよう、常に学生の様子を観察し、公平に一人ひとり声がけするように心がけていきたい。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

アフターコロナの展望がまだまだ見通せない状態のなか、引き続き非常時におけるカリキュラムの効率的な運営、教職員間の連携の強化、教育設備のさらなる充実を図っていく。コロナ禍によって今後一定の期間において従来より学生（留学生）数が減ることが予想されているため、そうした状況を見きわめ、学科の運営に大きな影響が出ないように留意していく。

[取組の結果と点検・評価]

日中クラスの学生は前年度に引き続き比較的少人数となったが、日英クラスとの授業における協働を例年に比べて多く模索し、実践に移すことができた。オンライン授業から対面授業への復帰がほぼ実現したため、授業以外の学校生活においても日中クラス・日英クラス間の交流や協働が多く見

られ、この点でも好ましい結果になったものと考えている。

[次年度への課題]

日中クラスの新入生は今年度より増える予定であるため、さらなる協働を模索し、日中クラスと日英クラスが相互に学習内容を活性化できるような方策を考えていく。日本のみならず国際社会の新たな動向や変化にも注意を払い、卒業後に社会の各方面で活躍できるスキルを身につけることができるよう、教材の内容や教学方法についても改善や更新を続けていきたい。

2 学校運営		評価
5	2-1 運営方針は定められているか	5
6	2-2 事業計画は定められているか	5
7	2-3 運営組織や意志決定機能は確立され、効率的なものになっているか	4
8	2-4 人事や賃金での処遇・職場環境の改善に関する制度は整備されているか	4
9	2-5 情報システム化等による業務の効率化が図られているか	4
10	2-6 学校運営を客観的に評価し、維持向上させる機能が整備されているか	5
11	2-7 危機管理体制は整備されているか	5
12	2-8 施設・設備は教育上の必要性及び学生の安全確保に十分対応できるよう 学校教育法に基づき整備されているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

- ・来年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を徹底したうえで、安全に教育活動を行う。
- ・関連省庁の指導にしたがって、入学希望者の安全かつスムーズな入国を目指す。
- ・日本語科と日本語教師養成科については、入国時期が遅れる学生に対しても、自国でオンライン授業を実施して学習機会を十分に確保する。日本語通訳ビジネス科については、入国待ちの学生に対するオンライン授業は授業の特徴から限界があるが、可能な限り入国を待ち、遅れて入国した学生に対しては入国後に補講などを行い学習を支援する。
- ・オンライン授業と対面授業を適切に組み合わせ、対面授業に引けを取らない教育の質を維持する。

[取組の結果と点検・評価]

- ・新型コロナウイルス感染症の感染防止対策については、前期はオンライン授業を中心に運営する、1クラス内の人数を少なくする、体調不良の学生には自宅待機を勧めるなど様々な手段を講じたものの、一定の感染者が発生してしまった。しかし、感染者の回復を第一に考え、東京都陽性者登録センターへの登録、その後の健康観察、必要な場合の通院の支援などできる限りのことは行い、重症者を出さなかったことは不幸中の幸いであった。また、感染者の学習面についても担任を中心として先生方がわからないところを説明したり、個別に課題を提示するなどして学習の遅れを最小限にとどめることができた。
- ・昨年度に比べて今年度の遅着者は少なく、5月中に入学予定の学生は入国することができたため、大きい問題には発展しなかった。
- ・前期は対面よりもオンライン授業を多く実施したが、これまでの経験を生かしてオンライン授業の質を向上させ、オンラインと対面の効果的な組み合わせ方なども工夫して対応し、対面授業のみの場合に引けを取らない教育が実施できた。
- ・東京都、渋谷区、出入国在留管理庁による合同の学校調査が実施された。概ね良い評価を受けたが、実際の授業科目と学則に記載されたものとの乖離の修正、出席率の低下を防ぐための指導の強化など指導を受けた。それらについて適切に対応をした。

[次年度への課題]

- ・ウィズコロナの時代となり、感染対策の在り方がこれまでとは変わってくる。それに応じて、感染者が増える恐れもある。そのような場合にも、感染対策を工夫し、オンライン授業も取り入れるなどして、学びが継続されるように努力する必要がある。
- ・学校調査の結果を踏まえ、今後も留学生を適切に管理し、学生が学習に集中できる環境を整える。

3 教職員		評価
13	3-1 教育理念・目標が教職員間で共有されているか	5
14	3-2 教育の質を向上させるための取り組みが確立されているか	4

《現状・具体的な取り組み／課題》

＜教育理念・目標が教職員間で共有されているか＞

[本年度の課題]

- ・年度末の全体反省報告会で1年間の教育活動を振り返り、見えてきた教育上の課題の改善を目指す。
- [取組の結果と点検・評価]
- ・昨年度の全体反省報告会での振り返りを踏まえ、各科とも教育上の課題に丁寧に取り組んだ。各科とも昨年度に比べて、対面授業の割合が向上し、学生の学習過程や変化を観察しながら効果的な指導の在り方を追求することができた。
- [次年度への課題]
- ・対面中心の授業体制に戻った後も、コロナ禍で培ったオンライン教育やLMSの知見をよりよい教育に生かすことが求められる。
 - ・年度末の全体反省報告会で1年間の教育活動を振り返り、見えてきた教育上の課題の改善を目指す。

＜教育の質を向上させるための取り組みが確立されているか＞

[日本語科]

[本年度の課題]

学生がアプリ、ツールを使うための教材はレベルに応じたものをさらに整備する必要がある。オンラインのツールの普及によって教員は研修会などへも以前より参加しやすくなっている。各教員が得た情報や学んだことを本校の教育に生かせるように、情報共有の場や、アイデアや意見を出しやすく、実践しやすい環境を作っていく必要がある。

また、二年目となる文部科学省のプロジェクトの円滑な進行を学科全体で支援していく。

[取組の結果と点検・評価]

学生が使用するオンラインツールに関しては各レベルに応じた使用ができるようになった。また、今年度は学校の共有アカウントを作成したことにより、Kahoot! や quizlet といった無料アプリを使用した共有の教材を作成、使用することが可能となり教材の幅が広がった。教員については全員参加の対面での会議を行ったり、「研究活動報告」でのオンラインの研修を行ったりすることで、意見交換、情報共有の場を持つことができた。

[次年度への課題]

教員の時間管理と教育の質の向上を両立させるため、今後も意見交換や情報共有の機会を増やし、そこで出された意見や情報をどのように活用していくかを検討する必要がある。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

今年度、ある程度教材をデジタル化することはできたが、より効率的に運営できるよう教材などを整備する必要がある。また、非常勤講師の割合が増えることで、教員の連携不足が懸念される。非常勤講師もチャットを活用する、出勤した際には対面で十分に情報伝達をするなどの対応が必要である。

[取組の結果と点検・評価]

対面授業が復活したことにより、教員間の連携は大きく改善された。学生同士でトラブルが発生した際も、全員の教師と情報を共有し、対応することができた。

オンライン授業の経験を経て、教員のICTスキルがアップし、提供できることが増えた。一方で、授業は「教材を作ったら終わり」ではなく、それをどう授業で扱うのかが大事であるということを学生に理解させる必要がある。

[次年度への課題]

来年度は担当教員が交代する可能性が高い。たとえば、日本語学「文法」の例文作成が教育学にもつながっていること、「初級の授業」で学んだ授業についての考え方は中級以降の授業に移っても引き続き重要であることなど、「すべての授業は有機的につながっていること」を教員自身が再認識し、授業で学生に伝えていくべきであると共有する必要がある。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

新たに嘱託教員を迎えることが決定しているため、古参の教員との意思疎通や情報共有などに配慮する必要がある。また常勤教員・非常勤教員間の意思疎通や情報共有にも引き続き最大限の注意を払っていくことが求められる。教材や IT 機器などの教育機材についても適宜点検と見直しを行い、教育の質を高めるための取り組みを継続させなければならない。

[取組の結果と点検・評価]

新たな嘱託教員を迎え、科全体の教育方針やカリキュラム構成、個別の授業の進め方や教材の開発などについて様々な指導と助言を行った。常勤講師と非常勤講師の意思疎通を積極的に行い、科としての教育目標を達成できるように努めた。課題として年度当初に掲げた教育機材の刷新には目立った進展は見られなかったが、CALL教室におけるパソコンの性能が向上したこともあり、教学上はより理想的な環境に近づいた。

[次年度への課題]

今後学内の Wi-Fi 環境がさらに整備されるなど、教育の質の面ではさらなる向上が期待される。日中クラス担当の専任講師については、世代交代を見据えて次年度中に何らかの目処をつける必要がある。このため教務や人事部門とも相談しながら具体的な方策を講じていく。

なお、オンライン授業で培った教員と学生の ICT スキルを活かして、より円滑な情報共有と意思疎通を目指す。

<教職員評価を行っているか>

[本年度の課題]

- ・一般事務職員の面談を通して、課題とその改善案を各員と共有する方法の確立を目指し、試行錯誤を繰り返す必要がある。
- ・教員の勤怠管理が今年度から新しくなった。それに伴い、教員の業務内容の見直しも行うため、全教員と十分にそれらについて共有する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

- ・学園の策定した人事考課制度にしたがって適切に考課を行った。教員については新しい勤怠管理制度のもと時間管理を開始した。
- ・人事考課制度の一環で行う一般事務職員に対する面談において、昨年度に引き続き、評価内容をわかりやすく伝えられるよう、管理職が事前に打ち合わせを重ねて実施した。

[次年度への課題]

- ・人事考課の一環として実施する一般事務職員に対する面談を効果的に活用して、各人のもつ課題を改善するための方策を上司と部下がどう共有していくかさらなる検討が必要である。
- ・教員の時間管理を通して、各教師の特徴に合わせた業務分担などの可能性を探る必要がある。

4	教育活動	評価
1 6	4-1 カリキュラムは体系的に編成されているか	5
1 7	4-2 授業評価の実施・評価体制はあるか	5
1 8	4-3 目標に向け授業を行うことができる要件・資質を備えた教員を確保しているか	5
1 9	4-4 成績評価は適切に行われているか	4
2 0	4-5 各種日本語試験の認定率向上のための指導体制は整っているか	5

<<現状・具体的な取り組み／課題>>

<カリキュラムは体系的に編成されているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

オンライン授業の導入だけでなく、CEFR、JF スタンドアードなどの普及により日本語教育の考え方や指導の仕方に新しい観点が生まれている。それをどのように実際のカリキュラム、教育内容に反映させていくかを検討していく必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

「日本語教育の参照枠」を参考にこれまでの教材を見直した。また各レベルで必要な能力を再検討し授業に取り入れたが、カリキュラム全体の改訂には至っていない。

[次年度への課題]

本校の対象学生に合わせた Can-do を作成し、年間を通してバランスよく四技能や進学先で必要な技能が身につくようなカリキュラムを再検討する。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

変更した「日本語演習」の教材や評価方法について点検し、改善していく必要がある。また、日本語教師養成に関わる必修科目においても、文化庁が提示する「日本語教師養成に関する教育」の 16 区分を十分にカバーし十分な教育ができていないか検討し、カリキュラム改定に向けて方針を固めていく必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

前期はある程度カリキュラム改定に時間を割き、日本文化論のカリキュラム全体を見直し、文化庁が提示する「日本語教師養成に関する教育」の 50 項目と照らし合わせながら、重なりや足りない部分を考えることができた。しかし、後期に入り作業が中断している。

[次年度への課題]

日本文化論のカリキュラム改定作業を再開し、さらに日本語教育学のカリキュラムも全面的に見直しをし、過不足のないカリキュラムになるよう検討する。次年度中には、日本文化論と日本語教育学の新教材作成に取りかかれるようにしたい。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

引き続き、対面授業とオンライン授業を組み合わせることで、1 年次と 2 年次の学習目標を科目担当教員間で共有し、齟齬がないよう綿密な意思疎通を図っていく。外部要因による授業変更も予測しながら柔軟な体制で対応する。遠隔授業で得た経験を今後にも生かすために内容を精査しながらカリキュラムに適宜盛り込んでいく。

[取組の結果と点検・評価]

前期は対面とオンラインの併用授業が滞ることなく実施できた。後期はすべて対面授業となったことで教員間の意思疎通も円滑に行われ、授業内容や学生の熟達度などに関する議論もできた。特に通訳翻訳科目に 1・2 年次の目標と内容が担当教員によって重なりや偏った部分が見られたため、見直しが必要となった。

[次年度への課題]

来年度は通訳翻訳科目において 1・2 年次の目標と内容に関するガイドラインを設け、共通の認識のもとで授業内容を検討し、バランスが取れたカリキュラムにしていく。

<授業評価の実施・評価体制はあるか>

[日本語科]

[本年度の課題]

引き続き、教員一人ひとりが学生の学習状況の把握に努め、自分自身の授業の改善に取り組むとともに、チームティーチングの利点を生かし、授業の相互評価、改善の機会を持つように心がける。

[取組の結果と点検・評価]

年度内に 2 回程度学生へのアンケートを実施し、授業内容について評価をもらっている。また、教員間でも必要に応じて指導方法などについて話し合い、各自で改善を行っている。

[次年度への課題]

引き続き学生からの意見も参考にしつつ、これまで個々に作成していた教材を教員間で共有し、授業内容の改善に役立てたい。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

次年度も学生一人一人の声や気持ちを大切に、より学びやすい環境を提供できるように努力する。また、教員同士の情報共有や意見交換の機会を確保するよう努力する。

[取組の結果と点検・評価]

対面授業の再開により、学生からの声をすぐに教員間で共有し、検討することができた。しかし、声をあげた学生から声だけを拾うことになり、不公平があった可能性もある。全員の学生から公平に声を聴くためには、個別に話し合う機会を増やしたほうが良いだろう。

[次年度への課題]

学生一人一人の声を聞く機会を増やし、クラス運営を円滑に行う。また、新しく担当になる教員か

らのフィードバックは客観的な評価につながるものであり、カリキュラム改定の参考にしていく。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

引き続き、学生一人ひとりの声を大切にしていく。遠隔授業でも学生とのやり取りを工夫し、学生の気持ちに沿いながら、共通理解を深めていきたい。なお、授業評価や要望を共有し分析・反映していくために、教員間で話し合う機会を増やすとともに円滑なコミュニケーションができるような環境づくりにも努力する。

[取組の結果と点検・評価]

各科目で年に2回程度、授業内容について学生へのアンケートを実施している。学生の声や気持ちを大切に、授業にも反映していく。教員間でも必要な情報を共有し、指導方法や内容について綿密な意見交換を行った。

[次年度への課題]

アンケートを通し学生の意見を吸い上げ、学習状況の把握や授業の改善に活かしていく。教員間では必要な情報や授業記録を共有し、引き続き授業内容に反映していく。

<目標に向け授業を行うことができる要件・資質を備えた教員を確保しているか>

[本年度の課題]

日本語通訳ビジネス科の非常勤から専任となる教員に対して十分な指導を行う。現在、来年度に新たな教員を採用する予定はないが、採用することになった場合は、これまでの経験を生かして面接や実技試験を通して質の高い教員が採用できるよう最善を尽くす。

[取組の結果と点検・評価]

日本語通訳ビジネス科の新たに専任となった教員に対して、専任教員が適切な指導を実施しながら、コース運営を経験させ、目標に向かって指導していくことの大切さや難しさを体験してもらうことができた。

日本語通訳ビジネス科では新たな教員を募集したが、採用することができなかった。

日本語科の教員が不足することがわかり、来年度に向けて2名の専任教員を採用することができた。

[次年度への課題]

日本語科の新任の専任教員が業務に慣れ、力を発揮してもらえるように教師と教務部が一体となって支えていく。

本部と連携しながら、本校が求める人材を適切に採用できるように募集の在り方に工夫を凝らす。

<成績評価は適切に行われているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

国内、海外ともに指導内容と評価方法、評価の妥当性に整合性があるかどうか、もう一度見直す必要があるだろう。また、来年度以降も定期試験をオンラインで実施しなくてはならない場合、試験方法・試験内容については継続してよりよいあり方を模索する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

今年度の定期試験は全て対面で行った。定期試験以外の小テストなどにおいて、ルーブリック評価を積極的に取り入れ、学生へのF Bに役立てられるよう努めた。日頃の学習がどのように定期試験の評価に反映されるかがわかりやすくなってきている。

[次年度への課題]

学習内容と評価の結びつきが学生に分かりやすくなるようにさらに工夫が必要である。指導内容と評価項目、評価方法について、引き続き検討を続けたい。

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

「日本語演習」科目の一部の評価方法が適切ではないと思われるため、早急に改善する必要がある。また、日本語教師養成に関わる必修科目間の、授業時間や演習の量と評価のバランスに問題点がある。カリキュラム改定の検討と同時に、適正な評価のバランスを検討する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

日本語演習の試験は改定をしたが、適切であったかどうかは結果を見て検証し、必要があれば改定

していく。また、日本語教師養成に関わる必修科目間の授業時間と評価のバランスは現在カリキュラム改定プロジェクトで見直している。

[次年度への課題]

日本語教師養成に関わる必修科目間の授業時間と評価のバランスについて、カリキュラム改定プロジェクトで引き続き検討していく。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

引き続き、成績評価の基準と根拠を学生に具体的に説明していく。なお、近年増えているネット上のものの引用やグーグル翻訳などに関しては学生へのネットリテラシー教育と注意喚起を強化する必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

学期始まりに成績評価の基準や根拠などを詳しく説明し、特にネット上の不正確な情報の引用や自動翻訳ソフトを利用した翻訳などに関しては注意を徹底した。なお、不正が発覚した場合は課題未提出とみなすなど厳しい処置をとっているため、学生もネットリテラシーの重大さを常に認識できているようだ。

[次年度への課題]

成績評価について学生に丁寧かつ具体的に説明していく。評価で課題の割合が多い科目に関しては、昨今話題となっている ChatGPT などを利用した課題提出やネット上の情報の剽窃などが無いようネットリテラシーの教育を徹底する。なお、教員側も日々変わっていくネット環境に対する知識を取り入れ、適正な評価ができるように評価方法を検討していく。

<各種日本語試験の認定率向上のための指導体制は整っているか>

[日本語科]

[本年度の課題]

学科全体で使用する日本語能力試験対策用のテキストについて検討し、選定する。また、各科目に対する授業時間の配分なども、使用テキストと並行して検討し直す必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

日本語能力試験対策用テキストの変更に伴い、授業の進め方などを再検討した。また、新旧のテキストの文型などの対照表や指導上のポイントなどをまとめた教師用の参考資料を作成して指導に役立てた。

[次年度への課題]

今年度の進め方での課題を踏まえて、指導方針を改善する。教師用の参考資料をより使いやすいものにする。

告示基準第1条第1項第44号 「課程修了者の日本語能力習得状況等」の報告内容

2023年4月20日作成

基準該当者割合 ②÷(①+③) 96.2%

- ・課程修了者数 ① = 103
- ・基準該当者合計数(実人数) ② = 125
- ・上記「基準該当者合計数」のうち退学者数(44号但し書き) ③ = 27
- ・基準該当者の各内訳

	日本語科 2021年10月期	日本語科 2022年4月期	日本語科 2022年10月期
a. 大学等への進学者の数	0	95	24
b. 入管法別表第一の一の表一若しくは二の表の上覧の在留資格への変更を許可された物の数	1	2	2
c. CEFRのA2相当以上のレベルであることが試験その他の評価方法により証明されているものの数	0	1	0

[日本語教師養成科]

[本年度の課題]

昨年度、各技能の通年目標を見直したことにより改善は見られたが、本年度も引き続き今回変更した教材等を見直していく必要がある。特に、効果的に読解力を伸ばすことができる教材、授業になっているかを早急に見直す必要がある。

[取組の結果と点検・評価]

本年度は学生全体の日本語力が高かったため、読解のテキストを変更した。しかし、彼らの高い日本語力を効果的に伸ばすことができる教材であったかは見直す必要がある。また、その中でも比較的日本語力が低い学生にとっては厳しい授業になってしまった。日本語科と異なりかなりレベル差がある中で、個々の学生に必要な能力が何かを見極め、それぞれに対応した授業を提供できるようにする必要がある。

[次年度への課題]

来年度は日本語能力試験で N1 を取得していない非漢字圏学習者もいれば、日本で大学院まで終了しほぼ母語話者レベルの日本語力を有する学生もいる予定で、誰に照準を合わせ、どのような授業を提供すればいいのか、学生のそれぞれの日本語力に対応した内容にするためにはどうすればいいのか考えながら実施する必要がある。

[日本語通訳ビジネス科]

[本年度の課題]

引き続き遠隔授業を併用していくので、オンライン教材を効果的に活用し学習できるように指導していく。なお、学生間でも勉強に関するノウハウを共有させ、学習意欲を高めていく。教員は対面で、できるだけ学生の学習状況を把握し、適宜フィードバックと指導を行う。

[取組の結果と点検・評価]

前期は遠隔授業だったが、後期は対面授業になったため、教員は学生の学習状況がより把握でき、それに合わせて適宜に指導を行うことができた。

[次年度への課題]

BJT は必修科目として J2、J1 を取得できるように引き続き指導していく。また昨今、単位を多めに確保するために試験対策の自由選択科目を受講する学生が数人いる。試験の準備が必要であると思われる学生には、教科の担当者、担任が個別の対応を行う。

5	学生支援	評価
2 1	5-1 進学・就職指導に関する体制は整備され、有効に機能しているか	5
2 2	5-2 学生相談に関する体制は整備され、有効に機能しているか	5
2 3	5-3 学生の心身の健康管理・事故・怪我サポートを担う体制があり有効に機能しているか	5
2 4	5-4 学生寮等、学生の生活環境への支援は行われているか	4
2 5	5-5 保護者と適切に連携しているか	4
2 6	5-6 卒業生への支援体制はあるか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

＜進学・就職指導に関する体制は整備され、有効に機能しているか＞

●進学

[本年度の課題]

コロナ禍で変化した入試の実施状況などを把握し、適切に学生に情報を伝えられるようにする必要がある。また、この2年間の経験を踏まえ、国内、未入国問わず、それぞれの学生が希望する進路に進めるよう、バックアップしていきたい。

[取組の結果と点検・評価]

今年度は全員入国できたので、担任からのきめ細かい指導が可能となった。推薦制度なども利用し、学生が希望する進路に進めるよう指導を行った。

[次年度への課題]

学生の学歴が多様化し、出願書類をそろえるのが難しい事例が出てきている。進学先とも連絡を取り合い、個別の事例に対応できるようにしたい。

●就職指導

[本年度の課題]

ウェブ選考の流れはコロナ後もある程度続くと見られるので、今後もオンライン化した就職活動への支援を模索していく。また、日本特有の就活においては、留学生の年齢が障壁になったり自身のキャリアをアピールできなかつたりという問題がある。キャリアをもって渡日する留学生を見据え、中途採用の就活の理解、情報収集等する必要性を感じる。

[取組の結果と点検・評価]

就職支援として外部リソースを利用し、オンラインでの模擬面接・エントリーシート添削などを行った。また、就職経験やキャリアのある学生に早めに中途採用枠を狙った就職活動を促すなど、多様化する学生の希望に合わせ、支援を行った。

[次年度への課題]

希望する働き方や勤務地、キャリアの有無など学生が多様化することを見据え、変化し続ける就職市場の把握および情報収集等していく。なお、オンライン就活（オンライン説明会、ウェブ面接など）が一般化しているが、面接が進むに連れ対面での面接も増えるので、オンラインと対面の両面への就職支援の方法を引き続き模索していく。

<項目「5-2～5-6」>

[本年度の課題]

- ・新任の寮長・寮母と一層コミュニケーションを深め、本校の特徴を理解していただき、学生の支援につなげたい。
- ・メンタルヘルスの観点からも学生をどう指導すべきか教師と事務スタッフ、学生生活支援室が連携して、より良い指導方法を模索する。

[取組の結果と点検・評価]

- ・学生課と教師が連携して、学生の生活上の問題点や学習上の問題点の把握、共有に努めた。
- ・学生生活支援室の助言をもとに、学習障害のある学生に対して、テストの時間延長など合理的配慮の範囲で対応をした。また、合理的配慮の範囲を超えてはいるものの、学生の要望に応じて家庭教師を紹介するという形で学習支援を行った。
- ・視覚障害を持つ入学希望者の受け入れの可能性を学生生活支援室とともに検討し入学前からその学生に本校としてできることを提示した。その後、その学生が入学することが決まったことを受けて、3月に教職員向けの研修会、4月に学生向けの研修会を実施する。
- ・寮長・寮母は昨年度から全員継続となった。新型コロナウイルス感染症の感染対策については、教務部と各学生会館との間で協力しながら適切に対応できた。
- ・寮長との連携が不十分になり、学生トラブルへの対応について、学生会館と教務部とで十分な連携が取れないケースがいくつかあった。

[次年度への課題]

- ・引き続き学生の相談事に教師も事務員も丁寧に対応する必要がある。
- ・学生生活支援室と連携して学生の特徴に合わせた対応を随時検討、実施していく。
- ・小平国際学生会館が閉じられ、しばらく休館していた杉並国際学生会館が再び活用されることになった。新たにドーミー井荻の運用も開始される。既存の寮に加え新たに運用される寮と適切に連携して学生の生活面を支援する。

6	在留管理と生活指導	評価
27	6-1 入国・在留関係の管理・指導と支援が適切に行われているか	5
28	6-2 日本社会を理解するための支援が適切に行われているか	4
29	6-3 我が国の法令を遵守させる指導を行っているか	5
30	6-4 常に最新の学生情報を把握しているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

- ・日本社会を理解するための支援、我が国の法令を遵守させる指導について、コロナ禍の入国指導が優先される傾向があったが、原点に立ち返り再度、海外事務所や海外受付窓口の協力を得ながら注力していく。
- ・新型コロナウイルスとの共存、共生の生活は今後も続くことが予想されるが、在留管理については、問題の早期発見、早期対応に努めていく。

[取組の結果と点検・評価]

- ・日本社会を理解するための支援として行っている冊子「安全な留学生活のために」（日本語教育振興協会発行）に沿った渡日前の指導について、再度、海外事務所や海外受付窓口にお問い合わせするとともに、冊子の在庫を確認して追加送付した。
- ・クラス担任と教務部スタッフとの連携により、授業欠席者については迅速な対応を行った。体調不良による欠席者については、感染症の可能性を常に視野に入れながら、適切な対応ができた。
- ・教育機関の選定結果において、「適正校（在籍管理優良校）」に認定された。

[次年度への課題]

- ・今後、新型コロナウイルスの感染症法上の分類について、政府は、現在の「2類相当」から、季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げる方針である。健康状態を含め学生の状況を把握することも、適切な在留管理に繋がることと捉え、学生情報の把握に努めていく。
- ・出席率が低くなっている学生への指導について、更に丁寧に実施する。
- ・卒業間際の日本語科および日本語教師養成科の学生の就職活動について、在留関係に係ることであるため、早期からの対応に努める。

7 学生の募集と受け入れ		評価
3 1	7-1 学生の受入方針は定められているか	5
3 2	7-2 学生募集活動は、適正に行われているか	5
3 3	7-3 学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	5
3 4	7-4 入学選考は、適正かつ公平な基準に基づき行われているか	5
3 5	7-5 適正な定員設定及び在籍者数になっているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

- ・日本語教師養成科について、日本人の募集についての考察は引き続き実施する。
- ・コロナ禍の中、日本語学校の先生との対面による情報交換は今後も困難なことが多いと思うが、SNSを有効利用したPRを実施していく。
- ・留学生数を注視しながら、首都圏以外の募集活動について検討していく。
- ・新年度も募集活動で海外に行けないことが予想されるため、海外事務所の協力は必要不可欠である。更に現地とのコミュニケーションを密にして、有効な募集活動を引き続き実行していく。

[取組の結果と点検・評価]

- ・日本語教師養成科の日本人の募集について、新年度に向けた募集方法を計画することができた。
- ・コロナ禍ではSNSを利用した広報によって、首都圏以外の学校からの資料請求等もあり、一定の効果があつた。
- ・本年度は募集活動で海外に行くことは出来なかったが、海外事務所の協力によって広報活動を止めることなく実施できた。

[次年度への課題]

- ・日本語教師養成科の日本人の募集について、日本語教育関係の大学院受験者や日本語教師に関心を持つ者が目にするSNSを用いた広報を実施する。
- ・SNSを利用した広報については、引き続き続けて行く。その中で日本語学校の先生方との繋がり等も持てるように努める。特に、コロナ禍では入国者が減ったことによって苦戦していた日本語通訳ビジネス科の入学者について、募集活動を強化していく。
- ・コロナ前に行っていたような日本から海外に出向いての相談会の実施については、学園内の他の学校とも協力をしてより効果的で効率的な方法を考えて実施していく。実施には海外事務所との連携が必要不可欠であるため、引き続き綿密な連絡を取りながら進めていく。

8 財務		評価
3 6	8-1 中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	4
3 7	8-2 予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4
3 8	8-3 財務について会計監査が適正に行われているか	5
3 9	8-4 財務情報公開の体制整備はできているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

[本年度の課題]

次年度は人件費など支出の見直しを進め、さらに支出の減少と、入国制限が解除されたことにより学生納付金の回復を目標とするとともに、学校会計の収支改善を図っていく。

[取組の結果と点検・評価]

2021年度は新型コロナの影響を受けない学院などの学生が増加し、学生納付金は3億5000万円の収入増となった。それに対し人件費は5億4000万円増加した。2022年度は一転して学生数の減少したため収入減が想定される。文化学園学校部門全体では9億円の黒字を維持しているが、今後は一層の財務の改善が必要である。

[次年度への課題]

次年度も引き続き人件費など支出の見直しを進め、さらに支出の減少と、入国制限が解除されたことにより、コロナ前に近い学生納付金の回復を目標とするとともに、学校会計の収支改善を図っていく。

9 法令等の遵守		評価
4 0	9-1 法令、設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	5
4 1	9-2 個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	5
4 2	9-3 関係省庁への定期報告を遅延なく実施しているか	5
4 3	9-4 自己点検・自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	5
4 4	9-5 自己点検・自己評価結果を公開しているか	5

《現状・具体的な取り組み／課題》

<項目「9-1～9-3」>

[本年度の課題]

今後も情報漏えいなどに注意し、増加し複雑化する入国管理局や渋谷区などへの報告も遅延なく行う。

[取組の結果と点検・評価]

今年度は情報漏えいなどの事象はなく、入国管理局や渋谷区などへの報告はコロナ禍の影響はあったが不備なく行った。

[次年度への課題]

今後も情報漏えいなどに注意し、増加し複雑化する入国管理局や渋谷区などへの報告も遅延なく行う。

<項目「9-4～9-5」>

[本年度の課題]

- ・「自己点検・自己評価報告」について、引き続きホームページ上で公開していく。
- ・次年度は、簡易的な自由記述のアンケートを実施して、学生の要望などを確認する。

[取組の結果と点検・評価]

- ・「自己点検・自己評価報告」について、予定通り4月にホームページ上で公開した。
- ・本年度12月、GoogleFormにて簡易的な自由記述のアンケートを実施した。

[次年度への課題]

- ・「自己点検・自己評価報告」について、引き続きホームページ上で公開していく。
- ・次年度は、学生生活調査の年度である。学生の傾向や要望、意見を把握し、改善できることは検討していく。

10 社会貢献		評価
4 5	10-1 学校の教育資源や施設を活用した社会貢献を行っているか	5
4 6	10-2 学生のボランティア活動を奨励・支援しているか	4

《現状・具体的な取り組み／課題》

<項目「10-1」>

[本年度の課題]

- ・今後も渋谷区在住外国人との日本語教室及び国際交流事業は続けていく。
- ・外国語保持教室はコロナ禍により2022年度も教室使用は無い予定である。

[取組の結果と点検・評価]

- ・外国語保持教室はコロナ禍でオンライン開催になり、外語の教室は使用しなかった。
- ・渋谷区日本語教室は4月から年144回開講し、渋谷区在住の外国人の日本語教育に貢献した。
- ・渋谷区国際交流事業は、3年ぶりに中止が無く、年4回川柳やお雛様作りなどを行い、日本文化の紹介や外国人との交流を深めることができた。

[次年度への課題]

- ・今後も渋谷区在住外国人との日本語教室及び国際交流事業は続けていく。
- ・外国語保持教室は2023年度より教室使用が再開し、教室賃借料収入が見込める。

<項目「10-2」>

[本年度の課題]

- ・日本人との交流やボランティア活動については、有益な情報を学生に引き続き提供していく。また、コロナ禍前に実施していた中学校との交流体験が復活した折には、積極的な支援を行っていく。

[取組の結果と点検・評価]

- ・日本人との交流については、杉並区立中瀬中学生や杉並区立堀之内小学生との国際交流を本年度も実施し、学生にとって大変有意義な経験となった。また、渋谷区国際交流事業についても積極的に参加する学生もおり、地域の方々との交流の機会となった。
- ・ボランティア活動については、希望する学生からの申し出により、学生課スタッフが小平市のボランティア団体を調べて実現までのフォローをするなどサポートを行った。
- ・英語を実践的に学びたいという高校生との英語ボランティア活動に参加した。毎回、3～4名の学生が進んで参加し、社会貢献とともに学生自らの学びにも繋がる経験となった。

[次年度への課題]

- ・次年度も引き続き日本人との交流の機会を学生に提供していく。また、ボランティア活動など、学生からの相談があった場合はできる限りのサポートを行っていく。

総括

言葉によるコミュニケーションを学ぶことで、国境を越えた「地球市民」になって欲しいと願っています。

今、世界各国で紛争が起き、自分中心にもの考えるようになったことで、水や空気は限界に陥っています。こんな時こそ、「地球号」に乗り合わせた私達は言葉の力によって未来を切り拓かなければなりません。

オンラインによる授業は難しい面もありましたが、「これで分かったかな？」と、相手を思う教育の基本が一層強くなったと感じています。学生に寄り添った教育を実践していることで、自己点検・自己評価には自信を持っていますが、今後共、対面とオンラインの良い所を組み合わせた教育を模索していきたいと思えます。